

各関係機関長 殿
病虫害防除員 殿

徳島県立農林水産総合技術支援センター
病虫害防除所長
(公印省略)

平成29年度農作物病虫害発生予察情報について

平成29年度農作物病虫害発生予報第15号を発表したので送付します。

平成29年度農作物病虫害発生予報第15号

平成30年3月22日
徳島県

I. 果樹

カンキツ

そうか病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 3月中旬の巡回調査では、旧葉での発生圃場率が26.7%と、平年(9.8%)に比べて高いが、発病度は0.09と平年(0.02)並の発生である。
- (2) 3月22日発表の1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か少なく、日照時間は平年より多く、特に期間の前半は気温がかなり高くなると予想されており、発生抑制的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 病原菌は病枝や病葉で越冬し、翌年の新梢発生時から6月頃まで新葉に雨滴によって伝染する。薬剤防除適期は4月上中旬の発芽直後(芽の長さ0.5~1cm程度)と5月中下旬の落花期である。
- (2) 春葉での感染が多いと果実の発病を抑えることは難しい。

かいよう病(スダチ)

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや少ない)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 3月中旬のスダチでの巡回調査では、旧葉での発生圃場率が100%、発病度が0.7と、平年(86.3%、1.6)並の発生である。
- (2) 3月22日発表の1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か少なく、日照時間は平年より多く、特に期間の前半は気温がかなり高くなると予想されており、発生抑制的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 病原細菌は水滴によって運ばれ、気孔、傷口から組織内に侵入する。風速6~8m以上の強風を伴う場合、侵入が助長されるので、防風林や防風ネット等を設置し、防風対策を行う。
- (2) 前年の夏秋梢に発生した病斑が特に翌春の伝染源となるため、被害枝はせん定の際に、徹底して除去する。

(3)発病が認められる場合には、発芽前の3月中下旬に薬剤を散布する。

ミカンハダニ

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや少ない)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 3月中旬の巡回調査では、旧葉での発生圃場率が53.3%と、平年(56.3%)並の発生であるが、寄生葉率は3.7%と、平年(8.4%)に比べてやや低い。
- (2) 3月22日発表の1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か少なく、日照時間は平年より多く、特に期間の前半は気温がかなり高くなると予想されており、発生助長的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 12月に薬剤防除を実施していない圃場では、3月中にマシン油乳剤を散布する。12月または3月に丁寧散布すれば、初夏まで抑制効果がある。
- (2) マシン油乳剤とボルドー液は14日以上間隔をあげ、散布する。

ウメ

黒星病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや少ない)で、発生程度は「中」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が50.0%、越冬病枝率が10.5%と、平年(77.8%, 14.2%)並の発生である。
- (2) 3月22日発表の1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か少なく、日照時間は平年より多く、特に期間の前半は気温がかなり高くなると予想されており、発生抑制的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 病原菌は、枝上に形成された病斑の組織内部で、菌糸のまま越冬し、翌春の伝染源となる。越冬病斑上に春先、分生子が形成され、雨水によって伝播し、幼果に感染するため、薬剤散布は4月上旬と4月下旬～5月上旬に行う。多発時には5月中下旬に追加散布する。。
- (2) 病原菌の潜伏期間は長期におよぶため、薬剤防除時期が遅れないように注意する。

果樹共通(特にモモ、ウメ)

果樹カメムシ類

1) 予報内容

発生時期 平年よりやや早い

発生量 平年並(前年よりやや少ない)で、発生程度は「少～中」

2) 予報の根拠

- (1) 3月の平均気温が平年値より高い年は、予察灯における初誘殺日も平年値より早い傾向があり(表1)、本年(2018年)の3月上～中旬における平均気温は平年値より1.0～1.7℃高かったことより、発生時期は平年より早いと推測される。

表1 3月の平均気温と果樹カメムシ類の予察灯への初誘殺日

年	3月平均気温 (°C)	平年差 (°C)	予察灯初誘殺 平年差(日) ^{*1}
2000	9.3	0	6
2001	9.8	0	-3
2002	11.6	2	-14
2003	8.5	-1	-1
2004	10	0	-6
2005	9.4	0	10
2006	8.5	-1	13
2007	10.3	1	-4
2008	10.6	1	7
2009	10.2	1	-8
2010	9.9	0	0
2011	8.3	-1	11
2012	9.5	0	3
2013	10.8	1	-6
2014	10.1	1	5
2015	9.9	0	-18
2016	10.5	1	-18
2017	9.2	0	5

*1 マイナス値＝平年より早く誘殺

(2) 2月に実施したチャバネアオカメムシの越冬調査(11地点×2か所調査)では、8地点で越冬を確認、越冬成虫は0.9頭/m²であり、平年(1.5頭/m²)並で、前年(成虫確認地点数は6地点、越冬成虫数は2.5頭/m²)に比べて低い越冬密度であった。

(3) 3月22日発表の1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か少なく、日照時間は平年より多く、特に期間の前半は気温がかなり高くなると予想されており、発生助長的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 果樹園周辺の雑木林から成虫が飛来するので、園内を巡回し飛来に注意するとともに、飛来を認めたら早急に防除を行なう。

(2) 夜行性の虫なので、薬剤の散布は夕方か早朝に実施すると効果が高い。

(3) 移動性が大きいので、広域一斉防除により防除効果の向上に努める。

II. 野菜

冬春トマト

疫病

1) 予報内容

発生量 平年より多く(前年より多い)、発生程度は「少～中」

2) 予報の根拠

(1) 3月中旬の巡回調査では、発生圃場率が30.0%、発病度が5.0と、平年(15.2%, 0.9)に比べて高い。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 気温が20℃位で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続く等、十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。

(2) 窒素肥料を過用すると茎葉が軟弱となり発生しやすくなるので、肥培管理に注意する。

(3) 罹病葉は伝染源になるので、できるだけ早く摘み取って、ハウス外で処分する。

(4) 病原菌は気孔から侵入するので、薬剤散布は気孔の多い葉の裏側を重点的に行う。特に、下葉には丁寧に散布する。

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年より多く(前年より多い), 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 3月中旬の巡回調査では, 葉での発生圃場率が40.0%, 発病葉率が2.5%, 果実での発生圃場率が10.0%, 発病果率が0.1%と, 何れも平年(葉:3.6%, 0.1%, 果実:10.0%, 0.1%)に比べて高い。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 気温が20℃位で多湿の時に発生しやすいので, 施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には, 暖房機のファンを作動させて, ハウス内の多湿化を防止する。

(2) 発病果や花弁などは伝染源になるので, できるだけ早く除去し, ハウス外で処分する。

(3) 薬剤感受性の低下を回避するため, 同一系統の薬剤の連用は避ける。

葉かび病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で, 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 3月中旬の巡回調査では, 発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が1.4%, 発病度が0.0)。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 気温が20~25℃位で多湿の時に発生しやすいので, 施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には, 暖房機のファンを作動させて, ハウス内の多湿化を防止する。

(2) 肥料切れは病勢の進展を助長するので, 肥培管理に注意する。

(3) 罹病葉は伝染源になるので, できるだけ早く摘み取って, ハウス外で処分する。

(4) 病原菌は気孔から侵入するので, 薬剤散布は気孔の多い葉の裏側を重点的に行う。

(5) 薬剤感受性の低下を回避するため, 同一系統の薬剤の連用は避ける。

コナジラミ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で, 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 3月中旬の巡回調査では, 発生圃場率が50.0%, 寄生葉率が5.8%と, 平年(41.0%, 3.4%)並の発生である。なお, コナジラミ種類別割合は, オンシツコナジラミが発生圃場率が30.0%, 寄生葉率が3.0%で, タバココナジラミが(50.0%, 4.0%)と, タバココナジラミの割合が高い。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。また幼虫は葉裏に多く寄生しているので, 薬液が葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。

(2) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので, 同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春ナス

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや多い)で, 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 3月中旬の巡回調査では, 発生圃場率が14.3%, 発病果率が0.1%と, 平年(9.5%, 0.2%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20℃位で多湿の時に発生しやすい。特に湿度の影響が大きいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。
- (2) 朝夕の急激な冷え込みは発生を著しく助長するので、適切な温度管理に努める。
- (3) 発病果や花弁などは伝染源になるので、できるだけ早く除去し、ハウス外で処分する。
- (4) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。
- (5) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

うどんこ病

1) 予報内容

発生量 平年よりやや多く(前年並), 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 3月中旬の巡回調査では、発生圃場率が14.3%, 発病葉率が1.6%と、平年(6.8%, 0.4%)に比べてやや高い。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生が多くなってからでは防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (2) 罹病葉は早期に圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。
- (3) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

すすかび病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや少ない)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 3月中旬の巡回調査では、発生圃場率が42.9%と、平年(65.6%)並の発生であるが、発病葉率は4.9%と平年(12.4%)に比べてやや低い。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が25℃位で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。
- (2) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬剤が下葉の葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。
- (3) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 3月中旬の巡回調査では、発生圃場率が14.3%と、平年(6.8%)に比べてやや高いが、寄生葉率は0.1%と、平年(0.2%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液が葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アザミウマ類

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年並), 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 3月中旬の巡回調査では、発生圃場率が28.6%と、平年(57.5%)に比べてやや低く、寄生葉率も0.7%と、平年(8.6%)に比べて低い。また、被害果率も0.6%と、平年(3.1%)に比べて低い。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

(2) 花器、新葉、葉裏、葉の重なった部分などに集まる習性があるので、それらの部分に薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。

(3) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

コナジラミ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 3月中旬の巡回調査では、発生圃場率が14.3%、寄生葉率が1.9%と、平年(16.0%、0.6%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。また幼虫は葉裏に多く寄生しているので、薬液が葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。

(2) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

ハダニ類

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年並)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 3月中旬の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が13.9%、寄生葉率が0.3%)。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。ハダニ類は葉裏に寄生しているので、薬液が葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。

(2) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春キュウリ

うどんこ病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少～中」

2) 予報の根拠

(1) 3月中旬の巡回調査では、発生圃場率が44.4%、発病葉率が3.1%と、平年(79.7%、12.6%)に比べてやや低い。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生が多くなってからでは防除が困難になるので、初期防除に努める。

(2) 罹病葉は早期に圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。

(3) 同一系統薬剤の連用は耐性菌出現の恐れがあるので避ける。

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年並～やや多く(前年並)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 3月中旬の巡回調査では、発生圃場率が22.2%と、平年(12.6%)に比べてやや高いが、発病果率は

0.8%と、平年(0.8%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20℃位で多湿の時に発生しやすい。特に湿度の影響が大きいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。
- (2) 朝夕の急激な冷え込みは発生を著しく助長するので、適切な温度管理に努める。
- (3) 発病果や花卉などは伝染源になるので、できるだけ早く除去し、ハウス外で処分する。
- (4) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (5) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

べと病

1) 予報内容

発生量 平年より少なく(前年より少ない)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 3月中旬の巡回調査では、発生圃場率が11.1%、発病葉率が0.1%と、平年(73.6%, 17.5%)に比べて低い。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。
- (2) 肥料切れや着果過多などで樹勢が衰えた場合に激発するので、肥培管理に注意する。
- (3) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬剤散布は、葉の裏側を重点的に行う。
- (4) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

褐斑病

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年並)、発生程度は「少～中」

2) 予報の根拠

- (1) 3月中旬の巡回調査では、発生圃場率が44.4%と、平年(77.4%)に比べてやや低く、発病葉率も3.8%と、平年(14.3%)に比べて低い。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。
- (2) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬剤散布は、葉の裏側を重点的に行う。
- (3) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年よりやや少ない)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 3月中旬の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が9.2%、寄生葉率が0.1%)。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液が葉裏にも十分付着するように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アザミウマ類

1) 予報内容

発生量 平年より少なく(前年より少ない), 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 3月中旬の巡回調査では, 発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が41.5%, 寄生葉率が5.5%, 被害果率が0.3%)。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

(2) 花器, 新葉, 葉裏, 葉の重なった部分などに集まる習性があるので, それらの部分に薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。

(3) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので, 同一系統の薬剤の連用は避ける。

コナジラミ類

1) 予報内容

発生量 平年より少なく(前年よりやや少ない), 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 3月中旬の巡回調査では, 発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が6.4%, 寄生葉率が0.2%)。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので, 初期防除に努める。コナジラミ類は葉裏に寄生するので, 薬液は葉裏にも十分に付着するよう丁寧に散布する。

(2) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので, 同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春ホウレンソウ

べと病

1) 予報の内容

発生量 平年より少なく(前年並), 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 3月中旬の巡回調査では, 発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が10.8%, 発病度が0.8)。

(2) 3月22日発表の1か月予報では, 気温は平年より高く, 降水量は平年並か少なく, 日照時間は平年より多く, 特に期間の前半は気温がかなり高くなると予想されており, 発生抑制的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 県内では, べと病菌レース13による発病が確認されているので, レース13以上に抵抗性を持つ品種を利用する。作型等の関係で作付けできない場合には, 薬剤による防除を徹底する。

(2) 平均気温が8~18℃で曇雨天が続くと, 多発しやすい。発生が多くなると防除が困難になるので初期防除に努める。薬剤は予防的に, また下葉や葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。

(3) 葉が繁茂して軟弱となると被害が多いので, 肥培管理に注意する。

(4) 病原菌は被害株についたまま越冬し, 春になると分生胞子を形成して伝染する。春先の発生を抑制するために, 薬剤を予防的に散布して発生を防止する。

(5) 罹病株を圃場に放置すると, 次作の第一次伝染源となるので, 発病株は速やかに処分する。また, 春先に萎縮して奇形となった株はべと病に感染しているので, 速やかに処分する。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年より少ない)で, 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 3月中旬の巡回調査では, 発生圃場率が9.1%, 1株当たり寄生虫数が0.0頭と, 平年(59.5%),

0.5頭)に比べて低い。

(2) 3月22日発表の1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か少なく、日照時間は平年より多く、特に期間の前半は気温がかなり高くなると予想されており、発生助長的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液が葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。

(2) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春イチゴ

うどんこ病

1) 予報内容

発生量 平年より少なく(前年並)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 3月中旬の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が5.7%、発病葉率が0.2%、発病果率が0.4%)。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生が多くなってからでは防除が困難になるので、初期防除に努める。

(2) 古葉を早めに除去し、葉裏に薬液が十分かかるように丁寧に散布する。

(3) 罹病した果実や茎葉などは早期に見つけ、除去した後圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。

(4) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年より少なく(前年よりやや少ない)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 3月中旬の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が12.1%、発病果率が0.6%)。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 気温が20℃位で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。

(2) 発病果は伝染源になるので、速やかに圃場から持ち出し処分する。

(3) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや多い)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 3月中旬の巡回調査では、発生圃場率が14.3%と、ほぼ平年(25.7%)並の発生であるが、寄生株率は1.4%と平年(4.2%)に比べてやや低い。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液が葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。

(2) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

ハダニ類

1) 予報内容

発生量 平年よりやや多く(前年並)、発生程度は「中～多」

2) 予報の根拠

(1) 3月中旬の巡回調査では、発生圃場率が71.4%と、平年(65.0%)並の発生であるが、寄生葉率は18.3%と、平年(11.3%)に比べてやや高い。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。ハダニ類は葉裏に寄生しているので、薬液が葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。

(2) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

Ⅲ. その他

1) 1か月気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か少なく、日照時間は平年より多く、特に期間の前半は気温がかなり高くなると予想されており、施設内外の温湿度格差が大きくなると思われるため、施設内の換気には注意する。

2) 水稻の育苗や甘藷の圃場準備等が始まり、農薬を使用する機会が多くなる時期である。農薬による危被害、事故等を防ぐためにも、使用時には周辺環境に配慮した上で取り扱うとともに、使用残農薬、廃液等は適切に処分する。また、水田に薬剤を使用したときは、7日間以上止水する。

3) 薬剤の使用に当たっては必ず使用基準を遵守し、周辺作物等へ飛散しないよう注意する。

発生量の表示

発生程度：甚>多>中>少>無

発生量：多い>やや多い>並>やや少ない>少ない

徳島県立農林水産総合技術支援センター病害虫防除所
URL : <http://www.pref.tokushima.jp/tafftsc/t-boujoshou/>

○ 病害虫の発生予察情報, 発生状況, 防除法等をお知らせしています。